



Title	平成28年度 観劇実習レポート
Author(s)	Cho, Hwajeong; 松本, 俊樹; 廣嶋, 萌衣 et al.
Citation	演劇学論叢. 2018, 17, p. 99-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97409
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

■平成28年度

観劇実習レポート

観劇レポート『アマハラ』―日本人の断片的経験・記憶としての戦前・戦後―（平成28年10月22日・平城宮跡）

CHO HWAJEONG

【著者からインターネット公開の承諾が得られていないため非公開】

観劇実習課題 砂壁のような生活―ピッコロ劇団『砂壁の部屋』―（平成28年10月22日・ピッコロシアター）

松本 俊樹

『砂壁の部屋』。これは何を意味するのか。ピッコロシアターでピッコロ劇団によって上演された『砂壁の部屋』であるが、近松賞受賞作品であるにもかかわらず、このタイトルへは審査員の多くが苦言を呈している。「砂壁の部屋」が登場する場面も一場面しかなく、その場面が作品全体のキーポイントとなっているかと言われると、そうでもなさそうであった。女優でもある劇作家自身がタイトルにまで付けた『砂壁の部屋』が何を意味するのか、考えながら作品を振り返りたい。

今里新地に住むユカミはダンスをしながら交際相手のイサムと遊びつつ暮らしている。初恋の人だった「あっ金」が置き去りにするよう去って以来、虚無的になっていたが、ある時、売春クラブで働くリョーコと知り合い、彼女が「あっ金」と思いき男性と知り合いであることがわかる。ユカミは「あっ金」とのつながりを求めてリョーコが働く売春クラブで働くこうとするが、そこで働いていたというナリコの名前を聞くと、彼女と以前知り合っていたことを思い出す。ナリコも又、「あっ金」と思いき人を慕っていたことを語っていた。そのナリコが死んでいたこと、「あっ金」と思われる人も既にいないことを知ると売春クラブで働くことを止める。その後、フィリピン地震で

「あっ金」が死んでしまったことを知り、時勢を皮肉る紙芝居を始める。

ユカミの友人、リョーコが住むのはいつ崩壊してもおかしくないような老朽化したアパートで、彼女の部屋はまさに「砂壁の部屋」である。劇中、度々地震について言及されるが、大地震に襲われるとこの部屋はひとたまりもないであろう。「砂壁の部屋」とは脆いものである。しかし、脆いのはこの「砂壁の部屋」だけだろうか。ユカミの人生自体が極めて脆いものの上に成り立っているのではないだろうか。ユカミはダンスを楽しみながら、時には交際中のイサムとパチンコへ出かけるなど、一見気ままに暮らしているかに見える。しかし、売春クラブで働くこうした彼女は、以前旅行先で出会ったナリコがその売春クラブで働いていたこと、そして死んでしまったことを知り、働くことを辞退するなど、その生活は危険と隣り合わせであることが暗示される。また、ユカミの人生に常に影響を与え続ける「あっ金」はフィリピンでの地震で命を落とし、ユカミ自身を大きく揺さぶる。ユカミの人生は地震などに大きく揺さぶられ、いつ崩れ落ちるかわからない。それはユカミだけでなく、「砂壁の部屋」そのものに住むリョーコやナリコも同じで、脆くも崩れ去ってしまったのがナリコの人生である。砂壁のように脆い三人が「あっ金」という男性の存在を思慕し、その思いに頼れなくなると揺すぶられ、崩壊する。

ユカミ達の砂壁のように脆い生活は、作品のファンタジーのような描写故にどこまでが客観的事実かわからない。ナレーションがユカミの口から芝居として語られる為、更にユカミの主観による物語らしくなる。しかし、ユカミが「砂壁の部屋」のように脆く崩れやすい生活を送っているのは事実であろう。ユカミという名前が「床見」、常に下を見て暮らしていることの寓意にさえ見えてくる。砂壁の様に脆

く、上を向くこともできない生活。そんな生活を送っているユカミだからこそ、最後の紙芝居の場面はその意味が分かりづらいにもかかわらず、彼女の抵抗の思っだけは伝わってきた。崩れやすく脆い人生を生きているユカミであるが、その芯は強い女性なのである。

観劇実習『水の駅』（平成28年11月13日・京都芸術劇場春秋座）

廣嶋 萌衣

【著者からインターネット公開の許諾が得られていないため非公開】

新作能『オセロ』（平成28年12月3日・大江能楽堂）

西田 悠哉

【著者からインターネット公開の承諾が得られていないため非公開】

『ミス・サイゴン』（平成29年1月13日・梅田芸術劇場）

中岡 愛

今回の公演は、『ミス・サイゴン』の日本初演時（一九九二年）からエンジニア役を演じてきた市村正親のラストステージであることが当初から注目されていた。カーテンコールでは、主役のキムよりも後からエンジニアが登場したことに、物語そのものよりも商業効果を狙っていることが明示されているようで、物語の内容との不調和に違和感を覚えた。エンジニアの夢見るアメリカンドリームはそれが幻想であることを知る観客には痛々しく映る。キムの死の影であり注目はされないが、アメリカに渡ることをがむしやりに夢見続けてきたエンジ

ニアが望みを絶たれて打ちひしがれる姿が私には印象的だった。若くない市村のエンジニアだからこそ、にじみ出る悲痛さには若気の至りではない重みを感じられた。年齢的な限界は見えるが、市村のエンジニアには滑稽なだけではない人間性があったように思う。

初演時は実物大のヘリを登場させる演出で有名であつたらしいが、諸所の問題から映像に切り替えられ、今回も映像による演出を用いていたが、その迫力は十分に発揮されていたのではないかと思う。この場面が物語の時系列に逆らつてキムによる回想として登場したことには、迫力の無駄遣いのような印象を受けた。しかし、ベトナム戦争を同時代の社会問題として扱いつつも、この場面を回想（あるいはフラッシュバック）とすることで、「キム」が時代を超えて存在する限り、ベトナム戦争は歴史としてではなく同時代的出来事として描くことが可能になるのではないかと考えた。もつとも、そうであつたとしてもやはりベトナム戦争を歴史としてしか知らない私のような観客が、それをリアルに感じることは難しい。

『ミス・サイゴン』は歌以外の台詞にも音程があり、オペラのようにだった。原作となつたオペラ『蝶々夫人』の名残ともとれるが、演者がその節をたどるのに手一杯な感があり、台詞が聞き取りにくいだけでなく表面的に感じられた。リアルで生々しい感情が行き交うはずのシーンがいまいち感じ取れなかつた。言葉の聞き取りにくさは三階席に座つたことにもよるだろうが、特にキムを演じたキム・スハの歌い方はどちらかというと中・小劇場向きで、声を張る場面を除いて、か細い声で歌うところは舞台から遠い席ではほとんど聞き取ることができなかつた。

一方で、はつきりと聞こえながら違和感を持ったのがブイドイの曲

において、英語版の「The dust of life」を「ロミクス」と訳している箇所である。「ブイ・ドイ」がベトナム語で「靴の裏についた犬の糞」を意味していることを受けていると思われるが、これはベトナム人から見た混血児を蔑んだ言い方であり、そのことを反省する姿勢を見せているアメリカ人が用いるにはふさわしくない。そもそもブイドイの支援機関の場面自体が物語から乖離した場面のように感じられ、アメリカ擁護のニュアンスが色濃く出ていたと感じた。アメリカによるブイドイ支援をさらに強調した『ミス・サイゴン』の続編は不評だったらしいが、それもうなずけるものと思う。